

作品と実生活

魯迅のなかの周樹人

儀我壯一郎
(ながさき そういちろう)

魯迅の母 魯迅の作品には、中国内外の諸矛盾、および、周樹人としての実生活の喜怒哀楽と深い思索が凝縮されている。家族から見よう。

魯迅の父・周伯宜は、一八八〇年、三歳年上の魯迅(二八五—一九四三)と結婚した。五人の子どものうち二人は夭折、長男樹人(魯迅)、次男作人、三男建人が次の世代となった。義父の投獄、夫の病死にともなう周家の没落過程で、明るく聡明、独学で字も読める学力に達していた魯迅の苦勞は、並大抵ではなかった。樹人は、母の気持ち痛みはよく理解し、「母の願望にそって生きていくことを自分の一生と思いつて生きているようになった」(三三政美「悩める家長・魯迅」日中出版、一九八八年、三四頁)。

受け止めたか。魯迅一家と親交があった魯迅によれば、朱安が、「石女は地獄に墮ちた。しかし正義である自分のために許広平という女が跡継ぎを生んでくれる。それで周家の嫁として自分は務めを果たしたことになる、地獄に墮ちる不安は解消される」と考えて自分を愁めた(沼野誠介、前出、八〇頁)。

日中戦争中の一九四〇年、八五歳の母・魯瑞は、朱安にみとられて逝去。その後の朱安は許広平の送金で西三条胡同の家を支え、一九四七年六月、六九歳の生涯を閉じた。許広平と魯迅との愛の進行は「兩地書」に示されている。さかればは、「狂人日記」(二九一八)の主人公の狂人は食われることをおそれながら、自分も「人を食う」が、「人」には、朱安が含まれるのである。

藤野巖九郎教授と数波重次郎教授

魯迅の「藤野先生」(一九二二)は、この二人の教授を対照的に描く当初の予定が、藤野先生ひとりに絞ら込むことになった。藤野先生の解剖学の魯迅の得点は実は五九・三点で不合格であっ

周家は、樹人の懸命の努力で復興し、一九二〇年の正月には北京八道湾胡同一一号の四合院に、母、樹人夫妻、作人と日本人妻・羽太信子、建人の六人がめでたく移り住んだ。清水安三の紹介でエロシエンコを同居させた時期もある(沼野誠介「魯迅と日本」文芸社、二〇〇四年、五六頁)。信子の妹・芳子と建人の恋愛・結婚の後、一九二三年七月、作人が樹人に絶縁状を送る事件が起こり、周家の離散が始まる。短編「兔と猫」(一九二二)は、「周家の嫁」として健気に生きる三太太(芳子)を描いた。その芳子には、一九二二年から上海に単身赴任していた建人と新しい愛人・王蘊和との間の長女出生という破局が訪れる。「傷逝」(一九二五)は、建人と芳子の恋愛と離別の深層と魯迅の複雑な心境を示す名作。正妻の悲劇として、樹人・魯迅の立場と酷似する側面にも留意しよう。

魯迅の二人の妻 魯迅の母は、樹人より三歳年上の朱安(一八七九—一九四七)を、樹人の許嫁と決めた。一九〇二年から東京に留学中の樹人は、婚

たが、一科目だけの不合格なので進級できなかった。当時のクラス総代、鈴木逸太の回想によれば、魯迅に対する「いやがらせ」は、藤野先生に対する一部の学生の反発が主目的で、魯迅のノートにの添削は、利用された形だ、ということである(三三政美、前出、一三二頁)。

魯迅と日本人との交流 魯迅の日記(一九二二—二六)は、一九二二年分が欠けているが、出てくる人物は一九五〇名、その中で外国人八四六名(日本一九七名、ソ連一三名、米國二名、ドイツ七名、英國二名など)。一九二一年だけでも、増田鼎、金子光晴、長谷川如定は閑、鈴木大拙、室伏高信、横光利一、林芙美子、新居格、武者小路実篤、長与善郎、前田河田二郎、尾崎秀実その他と会議。「一九三〇年代は日中知識人の間に革命的連帯があった頃」(沼野誠介、前出、八四頁)と交流した尾崎は「阿Q正伝」の共訳者である。魯迅の最後の直弟子増田鼎(後に大阪市立大学文学部教授の「魯迅の印象」(誠誠社、一九四八年、角川新書版

約の知らせに驚き、解消を求めたが、母は譲らなかつた。母親思いの長男樹人は、①満足を得ること、②学校で文字を学ぶことに条件に、やむをえず承認したが、条件は実現しなかつた。

一九〇六年七月、「母病氣、即刻帰国せよ」の電報を受けとつた樹人が帰国すると、朱安との挙式が待っていた。「朱安は母が私にくれた贈物だから、養うにやぶさかではないが、愛情は関知するところではない。親友の許養義は、魯迅のこの言葉を記録している(『亡友魯迅印象記』三三政美、前出、五〇頁)。

一九二三年八月に、八道湾の家を出る直前、魯迅は朱安に、①八道湾にとどまるか、②紹興の実家にもどるか、と尋ねた。朱安は、「私を(仮住居の)磚塔胡同につれて行って下さい」と答えた。二人だけで暮らすなかで、朱安は、良妻になろうと献身的に努力するが、魯迅の愛情は生まれなかつた。

一九二七年、魯迅は、上海で、北京時代の教え子・許広平と結ばれ、一九二九年九月、周海嬰が生まれる。

正妻の朱安は、許広平の出産をどう
一九七〇年)と伊藤漱津・中島利郎編訳「魯迅 増田鼎師弟答問集(汲古書院、一九八六年)は、一九三〇年代の魯迅を理解するための重要な文献に属する。

一海知義氏によれば、魯迅は、一九二八、九九年に河上肇の日本語の著書三冊を上海の内山書店で購入した。魯迅も河上肇も、その「文学」「経済学」だけではない、教育、文化普及、政治活動などの全体像を明らかにする必要がある(加藤周一・井上ひさし・杉原四郎・一海知義「河上肇」二一世紀に生きる思想)かまがわ出版、二〇〇〇年、一海知義「河上肇として中国」岩波書店、一九八二年など参照。魯迅と瞿秋白・毛沢東との関係は、丸山昇「魯迅没後七〇周年に思うこと」(しんぶん赤旗)二〇〇六年一月九日付、同「魯迅と『文化大革命』」(日中友好新聞)一九六八年一月一日付、中野美代子「中国のペガサス列伝」武則天から魯迅まで」(日本文芸社、一九九二年)、周海嬰の指摘(沼野誠介、前出、四二)など参照。